恩師・末永弘海先生召天 50 年を記念して⑶

姫路あけぼの教会牧師　廣田守男

末永弘海牧師の生涯の姿勢

１．祈りの器　　山手教会で朝と夜 3 時間ずつの祈り会が続けられ、祈りの訓練を受けておられた末永牧師は、姫路基督伝道館に赴任されて 3 カ年を目標にリバイバルを祈り続けられた。先ず祷告簿（残った人も分離した人も含め）を作り、朝と夜３時間ずつ祈り続けられた。（前任者が姫路市内で別個に集会を開始され、戦いの最中）。リバイバルのために 10 日間の断食をして祈っておられる最中に、姫路市内教会と和らぐことを示されて、ご自分が各教会を訪問されてお詫びをされた（末永牧師が赴任される前に姫路市内のある教会の婦人伝道師と数家族の信徒が転会される事件があった）。その後、５日間の特別集会を開いた時、神戸、尼崎、京都から先生方と多数の信徒が応援され、100 人近い長蛇の列をもって市中に案内し、チラシを配り、路傍での案内をした結果、特別集会は毎夜満員になり、多くの救われる方々が起こった。そして前任者の群れも解散して母教会に委託され、多くの方々が復帰されたとのことです。（毎月坊向牧師が神戸から応援に来ておられた。）

２．教会形成　集会は礼拝と祈祷会と伝道会と毎朝の早天祈祷会が一時間ずつ守られた。（戦前の黄金時代は定期集会が 80 名ずつ）。毎月感謝会を開かれるようになる。又、礼拝後に愛餐会を持ち、午後から、リバイバル祈り会を行われた。水曜日と土曜日を訪問日として集会案内をされた。教会の組織に関しては必要に迫られるに従って形成されていかれた。先ず役員会を組織され（それまでは世話役）、更に、牧羊会（役員や各委員、各組会などの責任者による）を結成し、その後に各部連絡会を設ける。

教会学校、伝道、壮年会、婦人会、若家族会、青年会、図書、組会（７カ所）、家庭集会（７カ所）、出張伝道（11 カ所）、真実の編集、発送、オーガニスト、生花、週報、受付、接待等の集会と奉仕が行われていた。

３．聖霊のバプテスマ　10 日間断食して、真剣に聖霊のバプテスマを求められる。信仰によって受けることを拒んでいるものは、献げない、従わない、明け渡さない心であることを示される。「信仰によって」が鍵であることを示される（使徒 15 章 9 節、ガラテヤ 3 章 14 節、エペソ 3 章 17 節）。

最初の頃は、ペンテコステ待望会 10 間（ペンテコステ礼拝の前）、一日 4 回、後には、聖日から聖日まで 8 日間、一日 3 回守る。聖霊を持つことと聖霊に満たされることの違いを強調される。聖霊を悲しませ（エペソ 4 章 30 節）、「聖霊を消している」（テモテ①1 章 6 節）状態ではなく、日々に、絶えず、御霊に生かされ、御霊に満たさ

れて歩むためである（ガラテヤ 5 章 25 節）。待望会は、全く明け渡してキリストを王として心の中にお迎えするための待望みであり、内なる聖霊が全霊、全生、全身を占領して下さることである。

栄化はキリストの再臨の時（コリント 15 章 52 節、ピリピ 3 章 21 節）、からだの変化であり、聖化は心のきよめである。犯罪は赦されるべきものであり、原罪はきよめられるべきものである。原罪＝遺伝性の罪の性質、古き人、罪のからだ（ローマ 6 章 6 節）、罪の法則(ローマ 7 章 25 節)、からみつく罪(ヘブル 12 章 1 節）、苦い根（同 15)、肉情、肉欲(ガラテヤ 5 章 24 節)と具体的に示されている。きよめの経験については、根絶説と圧迫説、瞬間説と漸次説がる。信仰によって、古き人を十字架につけることにより、最早古き人の支配から解放せられものとしての自由を得て、肉的生涯から脱して、聖霊の統御の許に生き、御霊に導かれる霊的生涯に入れられる経験においては、まさしく根絶であり、瞬間に信仰によって成される経験なのです。「キリスト者の完全」（ジョンウエスレー）には「キリスト者の地上において達しうる完全とは、知識的完全でなく、過失をしない状態でもなく、罪の誘惑を受けない状態にあることでもない。」とある。

コリントへの手紙第二 7 章 1 節。きよめは瞬間的に与えられる恵みであるが、漸次的に段々なされる働き、即ち、完成を目指して成長し、成就されていくのである。